

‘The Short Happy Life of Francis Macomber’ における愛と自我の世界

萩原千鶴子

人間の幸福とは相対的なものである。そして人は皆、その幸福という名の偽善を自分の力の限界内で手に入れようとする利己的な動物である。利己的な人間ほど、既存の幸福の中に甘んじて、真の幸福を手に入れるのは遅い。それは恋愛においても同じである。地位、富、名誉などの虚飾の中に恋愛を見出す女性は、常に結婚の損傷への heroine となっていく。そういう女性は、愛や孤独で悩む世界さえ持ちえず、ただ性の悦楽に身を委ねることのみが、彼女たちの満足を満たしている。

Ernest Miller Hemingway (1899~1961) の何編かの作品に現われる女性の一典型がそれである。“The Short Happy Life of Francis Macomber” (*Cosmopolitan* 九月号 1936) の Margot は “American female cruelty”⁽¹⁾ そのものを表わしている。作中の登場人物 Wilson の内的独白をかりていうならば次のような女性である。

They are the hardest in the world ; the hardest, the cruelest, the most predatory and the most attractive and their men have softened or gone to pieces nervously as they have hardened.⁽²⁾

つまりアメリカの富産階級の女性たちは、きわめて残酷で、時には売女のように、男を支配するものたちなのである。そして主人公 Macomber と夫人 Margot の結びつきは、金と欲にからんだ腐敗力の上に成り立っていた。

Margot was too beautiful for Macomber to divorce her and Macomber had too much money for Margot ever to leave him.⁽³⁾

Macomber にとって彼女は美しくあるが故に離婚しないのであり、Margot も彼の莫大な財産のために彼のもとを離れることができないでいる。しかもお互いに相手が自分のどこに魅力を感じているのか、相手の弱味をよく知りつくしているのであり、たとえお互いに対する悲劇的な心理の葛藤があっても、その魅力が続く限り、離れてしまう危険など心配する必要は全くなかった。

もちろんそれは真実の愛を基盤とした夫婦生活ではなく、むしろ文明社会に毒された愛と性の象徴である。なぜなら彼らたちの間には、sex と love をつなぐ完全な関係がどこにも見られないのである。Margot は Wilson と関係をもち、Macomber はそれを見て見ぬふりをする。ただ支配するという願望のうちに sex が成り立ち、sex がないところに love が存在するという恋愛の奇形な一面を見ることができるとはのではないだろうか。

一見、幸福そうな夫婦の間に、実は深淵な男と女の根本的な自我の対立があった。それはすでに恋愛という崇高な領域を越えた物欲と性欲の間を右往左往する利己的な自我の世界であり、彼らは自らそれを肯定し、自己満足のうちに生活を送っている。

作者 Hemingway はこの作品の中で女性をきわめて冷たく、客観的に扱うと共に、その女性に象徴された文明社会の“失った心の世界”を暗に非難している。Threodore Bardacke はその著書 '*Hemingway ; Hemingway's Woman*' (1950) の中で、この現代文明が失ったものに関して次のように述べている。

Hemingway has been fighting constantly against a mordern world that has lost its ideals... Since one of the most important of his lost ideals is love, he has often expressed his frustrations and desires of the mordern world with sexual symbols. For Hemingway, the complete relationship that unites sex and love, has been lost, divorced into either love without sex, or sex

without love.⁽⁴⁾

このように彼は現代の中の愛の空虚な姿態を、次に述べる“死”という彼のもうひとつの大きなテーマと共に作品の背景に象徴深く写し出しているのである。

それでは主人公 Macomber の“short happy life”とはいったいどんな意味をもつのだろうか。また、Margot が手にした銃の一撃がなぜ Macomber の頭に命中しなければならなかったのか、次にこの二点を中心に論じたいと思う。

主人公 Macomber は臆病で男らしくない人間として登場し、さっそく猟の最初の日にはライオンをねらって追跡しながら、その獲物をしとめる時になって失敗したため、妻 Margot と狩猟指導家 Wilson のさげすみをかってしまった。これに対して Wilson は勇敢で男らしく Margot の関心をひき、二人は関係をもつが夫の Macomber はそれを知っているながら男らしい態度をとらず、見過している。こうした Macomber を Margot は軽蔑し、Macomber は Wilson を嫌い、Wilson は二人をさげすんでいる。彼女はそんな夫の卑法者にかなり愛想をつかしているが、ただ彼の財力ゆえに彼のもとを離れられずにいることを自他共に是認している。彼女の性的な本能は主として、強い支配欲と力の強いものに対する渴望としてのみあらわれている。彼女は夫のすべてを知りつくし、支配し、利己的な欲求を金と性によって満足させ、物事をすべて自我の世界の中で処理しようとする。作品は単なる狩猟小説でもなく、また単に三角関係を描いた作品でもなく、どこか悲劇的な雰囲気をもった筋を展開していくのである。それは Macomber が翌日一転して勇気をふるい、獲物の追跡に熱中することから始まる。

For the first time in his life he really felt wholly without fear. Instead of fear he had a feeling of definite elation.⁽⁵⁾

彼は生涯に初めて恐怖から免れていることを感じ、生に対する熱望、

勇敢な男らしい感情が昂揚し、今まで感じたこともないほどの幸福感を感じた。その時、「偉大なるアメリカのおとなの仮面をかぶった子供」(The great American boy men)⁽⁶⁾から脱皮し、「人間として肝要なもの、人間をおとなにするもの」(Main thing a man had. Made him into a man)⁽⁷⁾を得たのであった。そして恐怖感が「手術でもしたようにとり除かれた」(Fear gone like an operation)⁽⁸⁾ Macomber には、もはや妻の不貞を黙認することも、自己の財産に彼女をつなぎとめておくことも、そして彼女の支配に屈して生きてゆこうとする姿さえどこにも見られない。それは、それまで冷やかな目で彼を見ていた Wilson にとっても感動的な男の成長であった。

By my troth, I care not ; a man can die but once ; we owe God a death and let it go which way it will he that dies this year is quit for the next.⁽⁹⁾

迫りくる巨大な水牛の前に立つ Macomber の姿には、この引用の如く、Wilson の生活信条が投影し、“死”への予告がつけられている。彼は新しい世界に行動した。そしてその行動の世界で、初めて新しい価値 (Macomber のいう幸福感) を手に入れるのである。たとえその行動において、死という試練にさらされたとしても、今までと異った新しい行動をすることによって、現代人につきまとう無気力、倦怠感、卑小さと無縁でいられるのである。そう考えてみると、滝川元男氏がこの作品の焦点を「鮮やかにうかびあがる Macomber の男としての成長」⁽¹⁰⁾にあわせていることの妥当さに気づくことができる。滝川氏はこの作品を「死の平面から解説した人間の精神的な世界とそこに展開する行為のパターンの具現化」⁽¹¹⁾としている。

しかしこの点に theme を見い出すならば、いったいなぜ彼の死を妻 Margot の手によるものにしなければならなかったのだろうか。この疑問を掘り下げてみると、やはり私はこの作品の主題は女性のもつ利己的

な自我と金の腐敗力に置きたい。

Margot Macomber は夫を嘲笑し、征服さえしている欲の強い利己的な女性であった。そして Macomber が敢然と男の成長を遂げると、彼を激励するどころか、軽蔑の目を向けた。それは彼女が今まで支配していたものが成長し、手におえなくなっていく予感に想像しない恐怖を感じたのであった。こうして物語の筋はあたかも彼女が故意に夫の頭に銃弾を命中させたかのように進行する。Macomber の死が単に accident であるか、或は殺人であるかはいろいろの説があるが、ひとまず私は accident と考えたい。しかしいくら accident であっても、現に Margot が発射した一撃は Macomber の頭に命中したのである。この accident がそうでないように描き出さなければならない作者の意図は、やはり女性の利己的で残酷な愛の生き方を theme として浮き上がらせようとしたが故ではないだろうか。

この結末を殺人ではなく、accident としなければならない理由が二つある。そのひとつは、彼女が直接手をくudした Macomber の死を機に Margot は彼女の今までの愛の処理方法を反省しなければならない立場にあると思うからである。つまり妻の銃弾が夫にあたって初めて自分が夫を愛していたという根本の姿に気づくのである。彼女はそれまでその根本原理を忘れ、虚飾な egoism と金の世界にのみ身を包んできた。そして彼女自身、自分が Macomber のもとを離れないのは、彼の財力ゆえと考え、彼の臆病の寛大さのために彼女は自由自在に振るまうことを許されてきた。しかし夫が撃たれて倒れた瞬間、彼女は今までの夫に対する感情が“誤ち”であったことに気づくべきであった。彼女は今まで自我の世界の中でしか彼をとらえることができなかつた不幸な性格の女性であり、愛の根本を見失なうほど自分の欲求や egoism に負けていた悲しい女性の愛し方の一典型であった。同時にまた、愛という永遠であるべきものが、金と欲という限界のあるものに負けていたという女性の愚かさも暗に描こうとしている。Macomber が射殺された直後の Margot と Wilson との会話の中で、彼女は Wilson にどんなことをいわれて

も、“Stop it”⁽¹²⁾ としか言えない。彼が “Why didn’t you poison him?”⁽¹³⁾ という探るような質問に対しても “Please stop it”⁽¹⁴⁾ である。ここで彼女は今までの自分の利己的な振るまいが、結局最後は自分自身の首をしめてしまったことに気づくのである。しかし作者はそこまで物語の中に描き出そうとは決してしていない。この物語の最後の Wilson の台詞, “That’s better. Please is much better. Now I’ll stop.”⁽¹⁵⁾ という皮肉っぽい会話に最後まで女性を客観的にとらえようとする作者の冷たい態度がうかがえる。

Macomber の死を accident としたいもうひとつの理由は、彼の死は決して彼の幸福の終止符であると考えてはならないということから発している。この作品の題名 “The Short Happy Life of Francis Macomber ” から憶測すると、彼が真に勇敢な男として堂々と闘いを挑むところが彼の生涯の最も幸福な頂点であり、妻の一撃は彼の「幸福」な生涯がまことに「短い」ものとして終わらせていくかのようである。「死」は多く悲劇の symbol として用いられるが、しかしこの Macomber の死は彼の幸せな生涯を閉じるものとしてのみ使われているとは考えられない。なぜなら彼があらゆる恐怖感から脱皮した時、彼の目に写った映像はあたかも死を受け入れんばかりの何か霊的な雰囲気漂っていた。そこに「死を受け入れることと死を与えることにみなぎる人間の権威」⁽¹⁶⁾ があった。Macomber が勇敢になったことだけが「幸せな生涯」だったのではなく、死をもって妻に彼女が彼を愛していたことを悟らせた点に一瞬の幸福があったのではないだろうか。Margot は彼が男の成長を遂げたことが遅すぎるといった。そして何かあるものを非常に恐れていた。解説者は次の如くつけ加えている。

She had done the best she could for many years back and the way they were together now was no one person’s fault.⁽¹⁷⁾

二人は最後になって、二人の愛を知ろうとしたが、しかしもうその時

はずでに遅かったのである。

最後にひとつ疑問に思うことは Wilson という登場人物の役割である。内的描写をあまり使わない Hemingway だが、この Wilson には筋の展開の際に内的独白をたびたび挿入させている。Wilson は直接 Macomber の死に手をくさず、作者の断罪はあたかも Margot だけに向けられているようであるが、しかし私は反対に彼こそ Macomber の死にもっと謎めいた関連があったのではないかと想像する。その Wilson の性格こそ残酷で冷淡で、何か二人をわなにかけたかのような余韻を残している。Hemingway は次のように Wilson に語らせている。

Doesn't do to talk too much about all this. Talk the whole thing away. No pleasure in anything if you mouth it up too much.⁽¹⁸⁾

この言葉が作品全体の根本に流れているかのように主題をぼかし、読者に多くの推理の可能性を引き出している原因のように思われてならないのである。

Notes

- (1) Theodore Bardacke ; *Hemingway : Hemingway's Woman* (1950) p. 349.
- (2) Ernest Miller Hemingway ; 'The Short Happy Life of Francis Macomber' (金星堂 1974) pp.59—60.
- (3) *Ibid.*, p.85.
- (4) Bardacke, p.341.
- (5) Hemingway, p.101.
- (6) *Ibid.*, p.105.
- (7) *Ibid.*, p.105.
- (8) *Ibid.*, p.105.
- (9) *Ibid.*, p.104.

- (10) 滝川元男『ヘミングウェイ再考』（南雲堂 1976） p.183.
- (11) 滝川元男 同上 p.182.
- (12) Hemingway ; p.112.
- (13) *Ibid.*, p.112.
- (14) *Ibid.*, p.112.
- (15) *Ibid.*, p.113.
- (16) 滝川元男『ヘミングウェイ再考』 p.182.
- (17) Hemingway, p.107.
- (18) *Ibid.*, p.106.